

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成24年12月号

平成二十四年十二月一日発行 第二十一巻第十二号 通巻第二五八号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 龍の夢

高橋将夫

虚心とは刈田のやうなものであり  
秋野には徒然草が生えてをる  
男には男の美学阿波踊  
瞑想はひたひた寄する秋の潮

心にも和音ありけり大花野  
やめなくてよかつた空は澄み渡る  
過ぎしこと熱く語つている夜寒  
鶉飼よりかなしきものに秋祭  
美しく山は粧ひ海静か  
自然薯のごとくに生きて来たるかな  
龍淵に潜み宇宙の夢を見る

# 槐安集

水野恒彦

夕映のひかり裸身の曼珠沙華  
身のどこか翳る感慨さ百日紅  
道の辺の墓碑に銅貨や雁渡し  
秋虹の根に躓きし暇かな  
音絶えて灯いくつ露無辺

延広禎一

白露の朝妻風神に攫はるる

白露九月七日巻巻

加藤みき

初鵬や赤き郵便受けの家  
母がりの闇に泛びし竈馬  
星月夜唄うて舞うて雨を待つ  
大花野あまたのもの卵抱く  
この涼は一日三秋の思ひなり

石脇みはる

かたみとて何もなきかなとろる汁  
あか茶けた父の形見の夏帽子  
輪の中に姉妹で入る踊かな  
日と月の入れ変はりたり海涼し  
ふるさとや墓参のあとの零余子飯



中島陽華

行宮ぎやうぐうの瓦占ひ雁渡る  
暫の大き片袖夜の秋  
妣が名は飯野真留子よとろろ汁  
むかごぼろぼろ大空に昼の月  
仏頭に赤梨剥いて供へけり

栗栖恵通子

万華鏡の一片よりの大花野  
ぽつぺんや師の忌日近くなりける  
すつぽんの首立てブルームーンかな  
いただきの神のブルームーンずぶ濡れ蛇穴へブルームーンは二月に二回の満月  
満月の後シテ正座つかまつる

竹内悦子

木の股に猿の腰掛省二の忌  
稲の穂の垂れはじめたる一途かな  
MRIの穴は添水の二重奏  
寝ころべば拵めさうなるいわし雲  
沢瀉と知らずにゐたり花慈姑

大島翠木

五指の間をさらさらと砂秋はじめ  
地卵のぬくみぞ子規の忌なりけり  
曼珠沙華地の夕焼けに謝すごとし  
川しちに海の魚飛ぶ秋彼岸  
ひよめきや白桃の皮そろそろ剥く

雨村敏子

一つ一つこの世を映し露の玉  
白木槿心礎に影の濃かりけり  
鬼灯を灯して闇を親しゆうす  
障子貼つて明るき書斎竹の影  
百歳のまだ見ぬこの世衣被

本多俊子

桔梗の白もて母をとりなさん  
みな過ぎて心の奥の秋のこゑ  
万物の息ととのふる九月かな  
天空を呑みし海より海月浮く  
神島の森かなかなしぐれかな

近藤喜子

草ひばり星の雫をなめて鳴く  
満たすならコスモスよ心の荒れ野  
神鹿の疑ふことのなき眼  
牧神の深き眼差し草かげろふ  
樹の寝姿あらはや二十三夜月

谷村幸子

瓔珞のゆれて銀杏落つる音  
鶏頭の種とつてをる日和かな  
白玉や讃岐土産の奉公さん  
筆順を空に書く子や猫じやらし  
代はるがはる牛を撫でをり蓮の花

瀬川公馨

花葛の紅迷ホシミに座を譲りたる  
べんちやらを聴き流したる李紅迷ニ紅楼夢きちがいかな  
細胞の一つ一つが胡麻の花  
枳原の實の下を素通りしてゐたり  
荻原を縛り付けたる大地なり

久保東海司

満天の星眼に馴れて夜の秋  
河鹿笛波立つ程の流れなし  
一山の蟬を気にせず座禅組む  
灯を消して鳴く鈴虫に夜をつくる  
鈴虫の世話はおのれの日課とす

西村純太

根の国に祭りありけりひよんの笛  
暮れ残る堅田の雁を見てをりぬ  
あきらかに弥勒のをりて星月夜  
歌女鳴くや地霊に宿るものあまた  
きれぎれの夢の果てより草蜉蝣

中野京子

白芙蓉繰り戸の中にさす朝日  
日の滴口に投げ入れ葡萄粒  
街角をまがれば旅へ涼新た  
コスモスの風に羽衣生れにけり  
わが球と思ふ球うち獺祭忌

柳川 晋

丸三角四角なきもの茸とり  
重力の魅惑が潜む黒葡萄  
金風を打ち延べてゐる俳諧師  
池池におらが大将鴨来る  
眠つたらおけらになると蚯蚓鳴く

岩下 芳子

思ひつくかぎりの赤を省二の忌  
見物の人も入りし踊の輪  
SLの煙引つ張る秋の空  
真夜中や九月の蟬の声ひとつ  
麓まで一気に来たる赤とんぼ



# 槐市集

本間瓦子

日展の日輪の燃えあがるなり  
恐ろしくかたく大きな門の火か  
難所ありすぎて恐ろし天の川  
ふさはしき歳時記探す袖に糊  
まだ残る暑さやプリンアラモード

前田美恵子

深吉野に秋の声聞き入らむとす  
清盛の舞ひ治まるや鹿の声  
秋うらら百年祭の浪花人  
出水後の静寂に人の立ち尽くす  
大らかや塩辛とんぼ付き来たる

松下八重美

犬に芸仕込んでみたり秋高し  
群とんぼ土浴びをする馬みたり  
前庭に桃たわわなる空家かな  
秋汐の引きて繋がる陸と島  
爽やかや反芻をする牛みたり

柳橋繁子

藍咲くや太く短かき半田麵  
禪もたゆむ処暑なり竜灯鬼  
聞き流す夫の甘言さんま焼く  
低く飛ぶ雨くる前のとんぼかな  
頂に立つや新米塩にぎり



# 槐集

## 高橋将夫選

還るべき土清らかや蚯蚓鳴く 撰津 中田 禎子

水底に闇の塊尾花蛸

定命に継ぎ足す炎カンナかな

月光やグラスに音のありにける

似る人の顔次々と十日月

蔓引けば土の中より子沢山 枚方 熊川 暁子

ぼつねんと脳をほしがる案山子翁

差し水にポットの騒ぐ夜長かな

クリスタルスワンの向かう神無月

蕎麦の花海なき国に波がしら

秋暑し急ぐ我が影追ひ越せず 喜屋川 山根 征子

洗濯物泳いでゐたり鱚雲

我が今を幸と思ひぬ破芭蕉

夕顔の折目正しき微笑かな

鬼灯の種抜くこつを知つてをる

雀大水に入りて蛤となる津田の浜 高松 十川たかし

松皮に眼すりつけ志功の秋

秋出水脈打つごとく坂落つる

秋の虹消えたる後も見ゆるかな

蓑虫の進むも退くもまほらかな

唯立つてゐるだけの桐実の揺るる 京都 竹中 一花

もみづりし樹の影熊楠曼陀羅に

色鳥や水鈍色の御所の池

神の獅子柞の杜に目覚めをり

泣く子をる稚児の行列萩の道

水の星自転の音す落し水 岡崎 犬塚李里子

水澄みて知足のおもひひろごりぬ

空蟬の瞬きしたり草の蔭

踏み入りて花野の道に行き昏れぬ

抱き枕うすぼんやりと後の月

# 銀河往来 高橋将夫

## ◇「槐集」 観照

還るべき土清らかや蚯蚓鳴く 中田 禎子

動植物も人もやがては土に還るから、土は清らかでありたい。きつと蚯蚓が土をきれいにしてくれるだろう。

〈水底に闇の塊尾花蛸〉〈定命に継ぎ足す炎カンナかな〉も、作者ならではの視点があつて惹かれる作。

蔓引けば土の中より子沢山 熊川 暁子

蔓を引いたらぞろぞろと小芋がついて出てきた。「子沢山」が作者ならではの表現で愉快。

〈差し水にポットの騒ぐ夜長かな〉〈蕎麦の花海なき国に波がしら〉も「ポットの騒ぐ」「蕎麦の花の波頭」の措辞が作者ならではのもの。

秋暑し急ぐ我が影追ひ越せず 山根 征子

どんなに急いでも、自分の影は当然ながら追ひ越せない。残暑の中、作者はなにをそんなに急いでいるのであろうか。

〈洗濯物泳いであたり鯛雲〉は素朴なところがよい。〈夕顔の折り目正しき微笑かな〉は句の姿がよい。

秋出水脈打つごとく坂落つる 十川たかし

今年は大雨による土砂崩れが多かった。「脈打つごとく坂落

つる」の措辞が水の勢いをよく捉えている。

〈秋の虹消えたる後も見ゆるかな〉は残像というより、願望であろう。尚、〈雀大水に入りて蛤となる津田の浜〉は〈雀大水に入り蛤となる〉で十分。

神の獅子柞の杜に目覚めをり 竹中 一花

「柞の杜」がよい。「神の獅子の目覚め」がよい。

水の星自転の音す落し水 犬塚李里子

「落し水」は田水を落とす水。落し水の流れる音がまるで自転の音のように感じたのであろう。

蜉蝣の命を繋ぐ乱舞かな 岩月優美子

蜉蝣の群れが水面を乱舞しているのは生殖の営み。まさに命を繋ぐ営みである。

かなかなを BGM に伊予訛 近藤 紀子

かなかなをバックグラウンドミュージックにして聞く伊予訛ってどんな感じなのかと想像してみるのが楽しい。

吸物は渦巻き湯葉と秋茗荷 谷岡 尚美

吸物と渦巻き湯葉と秋茗荷をならべただけの句だが、秋の味覚が目の前に浮かんで好感の持てる一句。

星月夜口いつばいに乳含み 江島 照美

口いつばいに乳を含んだ乳飲み子の景が「星月夜」でメルヘンの世界へ。(以下略)